

これからのまちづくりコミュニティ

新しいまちづくりと活気あふれる地域「コミュニティ」の形成が進められている「彩都」に「柏の葉」が
住民の交流を育む様々な取り組みがなされる場づくりについてお話いただきました。



「まちとライフスタイルの明日を探る」セミナー2011
日時 2011年3月8日(火) 15:00~17:20
会場 阪急グランドビル26階
主催 財団法人都市活力研究所
後援 彩都(国際文化公園都市)建設推進協議会
協賛 阪急電鉄株式会社、阪急不動産株式会社



第1部 基調講演

「柏の葉のまちづくりとUDCK」

柏の葉UDCK副センター長
三牧 浩也 氏

柏の葉アーバンデザインセンターは、千葉県柏市北部柏の葉地域における公民学が連携したまちづくりの拠点として、つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅東口に開設されています。

柏の葉の開発の3つのテーマ

柏の葉の開発を進めるにあたって3つのテーマが設定されました。
1つ目は、知的研究機関の集積に着目して、「国際学術研究都市」をつくるというテーマ。

2つ目は、人口が減っていく時代にこれだけの新しい大きなまちに何が期待されるのかと考えたときに、ありきたりの住宅地をつくるのではなく、新しい都市の未来像、モデルをつくらうという「次世代環境都市」として実験的なまちづくりをするというテーマ。

3つ目は、公・民・学が連携して、お互いに役割分担をしながら進める「まちづくりモデル」をつくるというテーマ。
「柏の葉国際キャンパス構想」はこの

3つのテーマに基づいており、「公民学連携による国際学術研究都市・次世代環境都市」が、まちづくりの大きなコンセプトです。これは2008年3月に策定されたもので、大学も一緒にまちづくりを担うという点が非常に特徴的です。大学とまちが融合した環境をつくっていく。空間的にも、機能的にも、市民生活と大学の創造的で知的な環境が混ざり合ったまちづくりを進めようとしています。

まちづくりの拠点としてのUDCK

そうした中、われわれが実際に活動を行うにあたって、まちづくりの様々なテーマや、まちづくりに関わる主体が、いろいろなお互いにはらばらにあつて、全体で議論する場所がまちの中になくはないのではという課題意識が生まれました。

そこで、まちづくりに係る多様な主体が、今までの垣根を越えて緩やかに水平



的に地域がつながっていくためのプラットフォームを拠点に、臨機応変に、動的に形を変えていくような地域運営「コミュニティグリッドと呼んでいます」をイメージしました。つまり、「プラットフォーム型の連携拠点として、アーバンデザインセンターをつくらう」ということになりました。分野や組織の枠組みを越えて、多様な関係者がプラットフォームに議論をし、連携する環境づくりです。

そのために必要なものとして以下の3つの考え方があります。

まず、いろいろな主体が緩やかに連携できる組織であるということ。あまり固めすぎないで、緩いネットワークをつくる。

ただ、このネットワークだけではすぐ分散する可能性も秘めているので、確固たる場所という、明確な拠点をつくる。

さらに、単にプラットフォームで協議するだけでは、明確な方向や方針を持たず、まちづくりができないということ。そこに専門性を持つスタッフを置く。

この3つが「アーバンデザインセンター方式」とわれわれが呼んでいるまちづくりの基本的な考え方です。

オープンな ネットワークの形成

こうした「アーバンデザインセンター」での活動を今のところ大きく5つの枠に分類して整備していますが、今日は、「コミュニティに関わるテーマに絞ってご紹介します。」

まず、「交流、学習」について話をしたいと思います。当初はプロモーション活動の側面から、さまざまなおアートのプロジェクト

を行っていましたが、その発展形として一つには、駅前ロータリーを使ったマーケット「マルシェコロール」があります。さらに、まちのお店や、地域の病院、銀行など、まち全体のお店で子どもが働くイベント「ピノキオプロジェクト」があります。新しいまちですから、子どものつながりから新しいコミュニティをつくっていくこと、ということから始めたものです。



市民サポーターが企画・運営に係る「ピノキオプロジェクト」

さらに、エリアマネジメントの側面で見ると、地域の緑をみんなど育てようという「かし＊はなプロジェクト」を千葉大学の協力を得てやっています。花だけではなく、駅前ロータリーでジャガイモを育てるといったようなこともやっております。

そうしたイベントを支えるものとして、「まちのクラブ活動」があります。これは、もともと、新しい住民がたくさん増えてくるなかで、住民同士を趣味的なところでつないでいこうということから企画しました。

全てのイベントやクラブ活動は、毎回、閉じたメンバーだけでやるのではなく、常に広く誰でも来ていいですよと

いうかたちでやることを重視し、抜ける人もいれば、新しく来る人もいるし、ずっといる人もいるという新陳代謝を大切にしています。

そうした「まちのクラブ活動」のスピノオプ的なもので、「マチノ先生プロジェクト」というものもやっています。地域の専門店や、住民の方の中にも専門的な技能知識を持っている人たちがいますが、そうした方に先生になってもらって、教えてもらう。そこからまたコミュニティが生まれてくるというプロジェクトです。

さらに、キャンパスタウンとして大学と市民の知の交流を促進するために、千葉大学を中心としたカレッジリンク・プログラムを行なっています。一方で、UDCKでは、まちづくりスクールも開催しており、市民のまちづくりのリーダーや活動メンバーの発掘やネットワークづくり、育成に取り組んでいます。



大学院生の提案で始まった科学の楽しさを伝える「サイエンスコミュニケーション」

「研究、提案」ということで言いますと、大学の都市デザイン演習プログラムをUDCKを使ってやっています。柏の葉を対象として、学生が地域に入って、市民や事業者と交流をしながら、新しいまち



パネラー

三牧 浩也

柏の葉UDCK 副センター長

平成18年より東京大学大学院新領域創成科学研究科非常勤講師。地方都市のまちづくりに従事。平成22年より副センター長として柏の葉UDCKの運営に携わっている。

づくりの提案や実践を行うというプログラムです。実際に柏の葉で、新しい取り組みをするといううえで大きなエンジンになっています。

他の取り組みとして「社会実験、企業創出」をテーマとした活動があります。自動車の共同利用などの交通系の実証実験、もともとなかなか自由に使えるコモンセンターサービスがあってもいいという発想から始めた公衆電源プロジェクトがあります。次世代環境都市ということ言えば、マンションや店舗にCO2の見えるモニターを設けて、モニターリングをしながら、削減を図ろうという取り組みも行っています。

空間デザインや研究、実証実験、そしてコミュニティの話など、いろいろなテーマはあるのですが、全てにおいて、UDCKの役割は、そういうものが最初に議論されるプラットフォームとしての役割を持っていることです。さらに、ただ議論するだけではなく、シンクタンクとして、自らがちゃんと構想を誘導していくという役割を持つということ。そして、それをプロモーションして、情報発信していくという。この3つの機能を中心的に担いながら、今後も取り組みで参りたいと考えております。



彩都棚田ファーマークラブ



彩都コミュニティ リトミック教室



彩都コミュニティ ワンコイン英会話



コーディネーター

澤木 昌典
大阪大学大学院教授

(財)関西情報センター、兵庫県立人と自然の博物館等を経て現職。環境共生や自然共生を重視した都市計画・地域計画に関する教育・研究を展開。地域の特性を生かしたまちづくりや環境学習等の市民活動も支援している。

澤木 まず、松尾さんから彩都のご紹介をお願いします。
松尾 彩都のまちづくりのコンセプトは、住宅を売って終わりではなく、デベロッパーとして積極的にまちづくりに関わっていくことということ、将来は住民も含めて一緒に参加いただきたいながら、コミュニティを引き継いでいける持続性を持たせていくことということをまちづくりのテーマに挙げています。
その中身を少し具体的に説明させていただきます。まず、「彩都スタイルクラブ」という会員組織を立ち上げました。これは彩都にお住まいの方を対象に、入

第2部 パネルディスカッション

「これからのまちづくりと コミュニティ ~柏の葉と彩都~」

パネラー

柏の葉UDCK 副センター長

三牧 浩也 氏

武庫川女子大学 教授

(株)PPI計画・設計研究所 取締役会長

三好 庸隆 氏

(社)コミュニティ彩都

松尾 友佳子 氏

コーディネーター

大阪大学大学院教授

澤木 昌典 氏



パネラー

松尾 友佳子
(社)コミュニティ彩都

平成2年に阪急電鉄株式会社入社。彩都の開発事業を担当。現在は阪急不動産株式会社で(社)コミュニティ彩都の運営に携わっている。

居後のコミュニティをサポートするので、会員の皆さまから月額500円の会費を徴収して運営しています。
そのサービスの一つとして、ポータルサイトの「彩都NAVY」の運営があります。まちの情報などを一方的に届けるだけではなく、住民の交流の場になるように、「おしゃべり広場」という、住民同士が意見交換していただける内容を盛り込んでいます。
それから、「提携共用施設」を導入します。彩都は戸建ての方も、マンションの方もいる、行政界が茨木市と箕面市の2つに分かれているということもあって、一つの場だけではなく、複数の場に、さまざまな属性の方に来ていただけるような仕組みを設けたいということ、マンションの共用施設を「彩都スタイルクラブ」の会員に開放するというルールを、最初の販売時から展開しています。
もう一つの特徴的なメニューとしては、今でこそ皆さんもお聞きになることが多いかと思いますが、7年前からカーシェアリングを実施してきました。
さらに、2007年に、まちのための法人という位置づけで、「コミュニティ彩都」という一般社団法人を立ち上げました。法人が前に立つことで、公益性、持続性の高い支援が行えるのではないかと



パネラー

三好 庸隆
武庫川女子大学 教授
(株)PPI計画・設計研究所 取締役会長

武庫川女子大学生活環境学部教授。株式会社PPI計画・設計研究所取締役会長。彩都をはじめニュータウンの計画・設計などに幅広く取り組んでいる。

う考え方です。活動の中心は、現状では、われわれ阪急や企業が中心になっていますが、いずれはこれらの活動を住民に引き継いでいくことを目指しています。
「コミュニティ彩都」の活動としては、例えば、地区外の棚田を活用した「棚田ファーマークラブ」というイベントがあります。また、マンションの共用施設である「コミュニティ棟」を、法人であるわれわれが一括で借り上げて第三者にお貸しする事業も行っています。さらに、行政界を越えて一緒に交流する機会として「コミュニティ彩都」が交流の仕掛けをつくっていく。こういったところも、「コミュニティ彩都」の目指すところだと考えます。
**エリアマネジメントが
これからの時代のテーマ**
三好 どのような地域、地区においても、これからの時代の大きなテーマとしてエリアマネジメント、地域のマネジメントが大事になります。
このエリアマネジメントには大切な視点がいくつかあります。主体の形成をどうするか、それがオーソライズされた仕組みであるかどうか、専門的ノウハウが集まる仕組みができていくかどうか、が大切です。さらに、そういう仕組みや

活動が継続できる経済的な裏付けがあるか、そういう仕組みや活動を実践するスペースがあるのかということも大切なポイントだと思っています。

澤木 ありがとうございます。新市街地開発はいま住民が自立的にエリアマネジメントをしていくような仕組みが課題になってきています。そのあたりを中心にお考えをお聞きしたいと思います。

経済的な基盤が今後の課題

三牧 柏の葉の場合は、まちづくりのベースとなる考え方に、空間として他にないものをつくりたい、あるいは、環境のシステムとして他にない先進的な仕組みを採り入れたいということがあります。それを実現するための仕掛けとして、地域住民を巻き込むコミュニティづくりを展開してきたという背景があります。

ただ一方で、住民の方々のサークル活動が急速に増えてきています。当初はまちのクラブ活動は完全無料でしたが、それでは限界があると思われる中で、どのようにお金を集める仕組みを採り入れていくかが課題になっています。拠点としてマンションのなかの共用施設などでの展開も考えていますが、管理組合との関係をどう整理していくか、マンション住民とそれ以外の住民の会費をどう整理するかなどがいままさに課題になっています。

澤木 ありがとうございます。先ほど公民学の連携というお話がありました。住民、あるいは住民組織の巻き込み方と

いうのはどうなっていくとお考えでしょうか。

三牧 エリアマネジメントで言うところまで考えているのは、マンションごとにそれぞれ管理組合や自治会を持っているので、その連合のまちづくり協議会的なものをつくり、平等にお金を出し合う仕組みをつくることです。

一方で、クラブ活動などサービスの享受者が限定されるものについては、参加者から会費を直接集めることも考えないといけません。さらには、マンションの共用施設の一部を管理受託して、そのサービスによる収益を運営費に回すことや、住民ネットワークを利用して企業からモニターを受託することなど、今後、活動費を確保していく上での事業展開を考えています。

澤木 ありがとうございます。いろいろな課題がある中、今後の展開について、松尾さんいかがですか。

持続を可能とする活動の模索

松尾 「コミュニティ彩都」としては会費をいただいた方への活動と、会費をいただいていない方への活動というのは、将来的には垣根をなくして住民の皆さんすべてにご利用いただけるようにしたいと思っています。

ただ、そのためにもなおさら、収益をどう生み出すのか。ボランティア精神にあふれた住民の方々に「コミュニティ彩都」の社員になっていただいて、公益施設を管理していただくような仕組みができないかと考えております。

三牧 続いていくためには、住民の手の届く範囲で、気軽に中身も変えられるよう、場所を変えることも考えられるような、小さい単位での公共空間というか、公共サービスの「種」をいっぱい、いろいろなところに時々ながらそれをネットワークする。非常に概念的ですが、そういうイメージではないかと思えます。UDCK自体は変わりながらも、そういうネットワークのハブとしての建物であったり、機能というのは継続していきたいと思っています。

三好 柏の葉にも彩都にも、これからの時代には選ばれる郊外住宅地に成長していただいて、日本のいろいろな大きな課題を解決する先進地になってもらいたい、そういう課題解決型のニュータウンになってもらいたいと思っています。

澤木 ありがとうございます。柏の葉と彩都が、新しい仕組みやビジネスをつくっていくトリガーになっていていただきたいという願いを込めて終わりにしたいと思います。



住民同士の交流がさかんな彩都